

(以下の文章は、1998年にミニコミ[shortcut](#)誌の別冊「ラフ・エディット」の第2号に掲載されたものです)

## 信仰生活

fukuju21

私は1988年6月から'94年5月までオウム真理教の信徒であった。実質的には'93年の12月に現在の住処へと引っ越しをする際、オウム側になんの連絡もなしに、言わば逃げるようにして「オウム真理教」という団体との関係を絶っていた。それはオウムの教義への不信からというよりは、それまでも度々行われていた電話や訪問による修行への参加を呼びかける攻勢が、その頃たいそう頻繁になってきたことに苦痛を感じてのことであった。私は自宅などで教団発行の本などを読み教義の勉強をするのは好きであったのだが、わざわざ「道場」に出向き（道場に入ることだけですら世間の目が気になりそれなりの勇気がいった）何時間かの間、体を不自由な状態におかれることが苦手であった。それはごくごく初歩的なヨーガのポーズであったり蓮華座（座禅の時のあぐらを組んだような座り方。脚が固いと組めない）を組んで1時間ばかりじっとしているだけのことであったのだけれども。そんな理由での脱会であったので95年の一連の大騒動においてもほぼ全面的にオウム側に立った報道の受取り方をしていた。実際にその年の夏頃だったと思うのだが、こちら側から連絡して再入信の意志があることを伝え、阿佐ヶ谷にあった教団関連のラーメン屋で出家信徒と会いもした。オウムに対し同情的な気分で再接近を試みた私は、それほど動揺も見せずにいつもの「雰囲気」を漂わせつつ「道場に行きましょう」「修行しましょう」とせまる出家信徒に、脱会した時と変わってない私のオウムに対する苦手な部分を思い出させ、時期的な状況の悪さからあまり強行に引っぱることができない信徒さんの言葉をのりくりりかわして「やっぱやめます」と言って逃げてきたのであった。

そんな具合に必ずしも熱心とは言えないが、ある一定の期間、確かに「オウム真理教」を信じていた者として、オウムの外側に出たように思える今、振り返ってみることはつまらなくもないことだと思い、ここに記していくことにする。

### ●1988年

この年の4月、家族との間にちょっとしたいざこざを起こし東京に出てきた私は、アパートに入居するための金を使ってしまうとほぼ無一文の状態であったため、すぐに金になる日払いのアルバイトや短期のアルバイトさがすことになる。引っ越しやら交通量調査、倉庫内作業なんかは今でも日払い仕事の王道なんだろう。そんな時期に10日間ばかりの期間限定バイトで、比較的好い金になるバイトを見つけた。大手町のビルの屋上にある塔屋の壁掃除ってのがその仕事で、高いところは屋上に足場を組んでやったので、ビルの窓拭きで乗るゴンドラほどには危険じゃないと思うのだが、かなりおっかなかったことを覚えている。そこで知り合ったのが当時埼玉は東武伊勢崎線沿線に住んでいたSという人であった。

Sという人とはとりたてて仲良くなったわけではなかったが、昼や10時3時の休憩のときに話すヨーガについての話題に私はたいへん興味を覚えた。Sは主に、そのヨー

ガの修行をすることによって得られる現世利益について話していて、私も東京に出てきたての若者が抱きがちな野望があったためそこらへんがまず第一の興味としてあり、さらに、オウムにひっかかった他の多くの例に漏れず、神秘的なこと超能力なんかのことにもかなり興味があった。ただ、実家にいる時に出入りしていた「EホBの商人」だとか近所に住んでる「S儒学K」の人間に相当な不信感をもっていたり、そのころすでに「勝共連G」(T O一教会)とかいう悪名も聞いていたんで、新興宗教全般にアレルギーがあったことは間違いない。それでも、その当時すでに「オウム真理教」と名乗っていた宗教団体のもとに話しを聞きに行くことになったのは、Sの誘いかたによるところが大きかった。Sは「オウム神仙の会」からの信徒で、オウムはあくまでヨーガの団体で自分は宗教の形にするのはあまり納得できないが税金とかの関係でそうしたほうがなにかと都合がいいらしい、とか言っていた気がする。嘘をついていたとは思わないが、とにかく宗教っぽい言葉はほとんど無く、修行するとこんないいことがある、あんな体験ができる、といったようなヨーガの効能についてのみ聞かされていたため、ほとんど抵抗なく「道場」にあしを運ぶことができた。

私が連れていかれたのは、世田谷の赤堤にある当時の東京本部で、普通のマンションのなかのテナント用につくられた1階2階部分にオウムは入居していた。1階は受け付けと出家信徒用の事務所、2階が畳じきで、三、四十畳くらいだったろうか、いかにも道場然としたところで、一角にはマンダラだかそんなような絵を中心に祭壇がしつらえてあった。麻原の写真もあったはずだがそれが中心ではなかったと思う。道場の入り口付近には小さく区切られた部屋があり、そこで責任者らしき人との面談はおこなわれた。

相手になってくれたのは当時ラクシュミー、後にサクラというホーリーネームで呼ばれ、弟子としては2番目に高いステージになる「正悟師」にまでなった、飯田エリ子である。仮谷さん拉致事件などで実刑判決をうけ、マスコミも結構取り上げる機会が多かったので、覚えている方もおられるだろう。Sから「修行」とか「道場」とかの言葉を聞いていた私は、そんなところにいる人はゴツかったりキリッとしてたりするんだろうと勝手にイメージしてたんだが、この飯田は顔立ちといい話し方といいものすごくあたりの柔らかい人で、尻軽にもほいほいとSのあとにくっついてきた私ではあったがいくらかでもうさん臭いところ、たとえばそれまでに会った宗教信者のような押し付けがましい雰囲気とか、があるようだったら逃げようと思っていた気分も粉微塵に吹き飛んでしまった。どんな話しをしたかはほとんど覚えていない。基本的にはSからそれまでに聞いてきたことと大差なかったんだと思う。どんな願望があるんですか、なんてことも聞かれたかな。ただ、願望を成就させるのもそれはそれですばらしいことだが修行しているとそれ以上にすばらしい状態がおとずれる、みたいなことは多分それまでにSからは聞いてなかったことで、たしかにこういう普通の人、どころじゃない、こんな感じの良い人、が出家という形をとってまで修行中心の生活をしているのにはそれなりの深奥な境地を味わってるからなんだろうなあ、なんて納得し、すぐさまその日もらった壁拭きバイトの金で入会金3万円、月会費3千円の半とし先払い1万8千円、計4万8千円を払い込み、めでたく入信と相成る。

入信に際しては3つのコースがあって、一つには今生と来生の幸福を求める人のための「ポア・コース」(ポア!)、二つめに超能力を得たい人のための「シッディ・コース」、最後に、前の2つのコースで目指すような目先の利益もかなえ、それ以上のさらなる幸福(解脱)を求める「ヨーガタントラ・コース」というのがあり、後者ほど金がかかる仕組みだった。パンフとか捨ててしまったので確かめようがないのだが、たしか「ポア・コース」ってのは月会費が千円で入会費が無かったか、あっても1万とかそのくらいだったように思う。Sの金銭感覚では5万近くにもなる金をたいした検討もせ

ずに払いこむのは信じられないと、ちょっとびっくりしたようであった。入っても「ポア・コース」くらいだとも思っていたのだろう（後にたいへん刺激的な意味で使われた「ポア」って言葉も、このころはその語感通りのぬるい意味あいしか感じられるものではなかった）。

前に私は「新興宗教全般にアレルギーがあった」と書いたが、「宗教全般」にわたってアレルギーがあったわけではない。キリスト教にしろ仏教にしろその原点近くにさかのぼればなにがしか現代の人間にも知りえない「本当のこと」を言っているのではないかという直感というか期待というか、そんなものがあった。そして、その「本当のこと」は現代科学と矛盾することなく、しかし現代科学ではなしえない現実の変革、私の場合は社会の矛盾がどうのこうのというより、自分の地位やら金回りやらといったものをより良い方向にもっていってくれるような変革、をしてくれる方法が仏教やヨーガにはあるんじゃないか、というような思いを、それまでの貧弱で偏った読書経験などで培っていたわけで、そんな下地があったからこそ具体的な方法を示してくれ、それによって実際に現世的な利益を得られたというSや飯田の話しがあり、さらにはそれ以上の「幸福」があることを確信して出家生活を送っているという何百人の信徒がいるというんだが、コロリと入信してしまうのにも無理はなかったんじゃないかと今にしてみれば思える。

とかいって、コロリと入信した割には、私はなかなか修行しに行くことはなく、せいぜい土曜日の午後定期的に開かれていた、出家信徒の体験とかを聞く参加費千円の「勉強会」なるものに参加（それもごくたまーに）するのと、「バクティー」といわれる簡単な奉仕作業をしに（これもごくごくたまーに）いくくらいであった。オウムでは知られている通り「カルマの法則」を説いていて、なんらかの現世的な利益を得るためにはそのもととなる善行、功德を積むことが大事だという訳である。一般の信徒に与えられる「バクティー」で主なものは、麻原の著作物の宣伝チラシを撒くことで、「勉強会」では、ビラ配り十万枚達成、とかいって表彰みたいなこともしていたんじゃないかな。毎週火曜の夜とか日曜だとかに一度道場へ集まり、信徒の何人かが乗ってくる車に分乗して、首都圏近辺の団地など大量に捌ける場所を狙い出かけたりもしていた。私は二度ほど、他の信徒と一緒にビラ配りに参加しただけで、あとは自分ちにチラシを束で持ち帰って、近所で配ったりしていたのだが、実のところこのビラ配りも熱心にやっていたとは言えない。じゃあどんな「バクティー」をしていたのかと言えば、皆で一緒に出かけていってするビラ配り用のチラシを、配りやすくするために四つ折りにする仕事があって、それがそのころ私のメインの修行だったのである。だいたい、現実的な努力を迂回して“得”しようとしている人間が、それ以上の苦勞をするわけがない。なにも考えなくていい、体力は使わない、一般の人とはち合わせにならなくてすむ、金はかからない、でも功德は積める。ビラ折りはそんな私にピッタリな「修行」だったのである。

実物の麻原を始めて見たのは、入信してまもなくの勉強会か、「真理の集い」とかいう説法会のいずれかだったと思う。オウムはすでに全国展開を始めていて、その年の夏には富士の総本部道場（上九ではない）ができるなど、多忙のためか勉強会に麻原が来ることはほとんど無く、麻原が東京で説法する、ってなったら、これはもう絶対聞きにかなきゃいけないという雰囲気は信徒のなかにはあった。そんなことは、教祖なんだから当然といえば当然ではあるんだけど、回りがそんな状態であったため、麻原が来るとなると私も行かなきゃなんないもんだって気がしたし、似たようなことを思ったんだろう信徒が、普段の勉強会では考えられないくらい集まった。で、まあ、実物を見るわけだが、有名な人のコンサートなんかと一緒に、おおこれが本物か、という感

想があつたくらいでこれといった印象が残ってるわけじゃない。写真で見るより若いかな、とかは思ったかもしれない。ともかく、私の麻原に対する「凄い人（っぼい）」ってイメージは、麻原本人から受けたというより、回りの信徒の影響によるところが大きかった。

このころすでに麻原は「尊師」の敬称で呼ばれるようになってはいたのだが、まだ「先生」と呼ぶ人も多かった気がする。Sもその一人だったせいか、私の麻原に対する感覚ってのは、後にみんなが「尊師」「尊師」と呼ぶようになってからも「先生」のほうがぴったりきた。オウム内で話しをするときでも「尊師」と口に出すのは、いつも少々ひっかかりを感じていた。

家族ともめにもめ、なかば飛び出るように上京をし、わずか2万5千円の家賃が払えなくなるまで競馬にはまったりしたこの年は、今からは考えられないくらい長い一年であった。もちろんオウムというなにか非常に魅惑的な技を持っているらしい団体に所属できたことも大きな出来事の一つではあったのだが、やはり「オウム真理教」という宗教教団の体裁に後ろめたさのようなものを感じたせいか、家族知人等、ただの一人にも私がこういう団体と関わっているということは話さなかった。私のなかで現実の生活と信仰生活（このとき自分では「信仰」だなんて思っはいなかったんだけど）とは、まったく切り離されていた。正確に言うと、現実生活のための信仰であった。Sとの間にも、大手町のバイト以降はまったく連絡をとることもなく、私がたまに勉強会に参加したとき、帰り道に少しばかり話しをするくらいであった。

この年の、暮れ近くの勉強会だったと思うのだが、熱心に修行を進めていたSに、出家しないか、という話しが教団からあったということをも本人から聞く。道場に顔を出すのもまれな私には、オウム内の知り合いというのはSだけで、そのSが「出家」しようかどうか悩んでいるのを見た時は、始めて「出家」というものが目の前にあらわれたような気がして少々戸惑った。「出家」という制度があることも、「出家」するにあたり全財産をオウムに譲り渡し家族等との縁も切ってしまうということも、教団発行の雑誌や麻原の著作によって知ってはいた。知ってはいたけれども、知っただけであった。現世を捨てる、つまり自分らの住む世界とはまったく違う価値のもとに生きていくことになるのかもしれない人の存在が目の前に現われたことによって初めて「出家」という境界を意識するようになる。このときSに、「君は出家とか考えないの？」とか聞かれことを覚えていて、あまりにリアルな出家話にびびった私は「まったく考えられない」と答えたのだが、ほんとのところ、5年後10年後には出家することになるかもしれない、と、漠然とではあるが思っていた。この時点ですでに、そこそこオウムの世界観に染まっていたのである。

在家信徒としてのSと会ったのはこの時が最後だったと思う。

1 2 3 4 5 6

